栃木県埋蔵文化財調査報告第416集

鳴井上遺跡 II

―快適で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道那須黒羽茂木線下境工区に伴う発掘調査―

2024.3

栃　　木　　県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

鳴井上遺跡 II

（なるいうえいせき）

―快適で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道那須黒羽茂木線下境工区に伴う発掘調査―

2024.3

栃　　木　　県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

鳴井上遺跡は、栃木県の東部、那須烏山市に位置しています。昭和57年に栃木県教育委員会により「栃木県重要遺跡」の一つに選定され、この地域の縄文時代を考えるうえで重要な遺跡と位置づけられていました。平成12・13年度に実施した遺跡範囲確認調査により、縄文時代の竪穴住居跡の他にも、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡が多数発見されて、あらたな遺跡の時代を知ることができました。

この度、主要地方道那須黒羽茂木線の拡幅工事に先立ち、路線内に所在する遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査は、平成26年度刊行の「栃木県重要遺跡現況確認調査報告書」で遺跡の範囲の可能性が及んでいると考えられていた、県道那須黒羽茂木線の一部について実施し、縄文時代、古墳時代から平安時代にかけての多くの土器を発見することができました。このことにより、遺跡の南東側の範囲を確認できました。

本報告書は、鳴井上遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました、栃木県県土整備部、那須烏山市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和6（2024）年3月

栃　木　県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

例　言

1　本書は、栃木県那須烏山市下境地内に所在する鳴井上遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、県道27号那須黒羽茂木線、那須烏山市下境地区の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、令和２（2020）年度に実施した記録保存のための発掘調査である。

3　調査は、栃木県より公益財団法人とちぎ未来づくり財団へ業務委託され、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが、栃木県教育委員会文化財課（現生活文化スポーツ部文化振興課）の指導のもと実施したものである。

4　本発掘遺跡の現地調査及び整理報告作業期間は以下の通りである。

令和２年度　発掘調査（発掘）

期　間　令和２年（2020）年９月１日～令和２（2020）年11月30日

担当者　調査課　主任　植木茂雄

令和５年度　発掘調査（整理・報告）

期　間　令和５年（2023）年４月３日～令和６（2024）年３月28日

担当者　整理課　主査　植木茂雄

5　本書の執筆・報告書作成は植木茂雄が行った。第３章４節遺物では江原　英の協力を得た。

6　鳴井上遺跡の調査にあたり、以下の事業を委託した。

基準点測量及び基準杭設定・遺構実測図作成業務：株式会社シン技術コンサル

7　発掘調査中における遺構の写真撮影は発掘調査担当者が行った。遺物写真は下野印刷株式会社が撮影した。

8　発掘調査・報告書作成にあたっては、次の方々から御指導・御協力を賜った。

那須烏山市教育委員会

9　発掘調査の参加者は、次の通りである。

久郷ヨシエ　大輪カヨ　高久昌彌　冨田義弘　松本一夫

10　整理・報告書作成作業参加者は、次のとおりである。

長　道子　田中英紀

11　本遺跡の調査概要は、栃木県埋蔵文化財保護行政年報・埋蔵文化財センター年報で一部報告されている が、本書をもって正式報告とする。

12　本遺跡の出土遺物・図面写真及び資料等については、栃木県が保有し、栃木県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

凡　例

1　遺跡

遺跡の略号は KY-NR（KarasuYama-NaRuiue）である。

2　遺構

⑴　遺構の略号は、奈良国立文化財研究所が用いる SI（竪穴建物跡）・SK（土坑）・SD（溝）に準拠する。

⑵　遺構図の縮尺は挿図中にスケールで示す。

⑶　セクション図の「L.H.」は線上の標高を示す。

⑷　方位は国土方眼座標に拠っている。

⑸　土層堆積図の番号は堆積の順序を示すものでなはい。

⑹　写真の縮尺は不統一である。

3　遺物実測図の縮尺は挿図中にスケールで示す。

⑴　胎土の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修　1996 年版）を参照した。

目　次

序

例言

凡例

第 1 章　調査の経緯

第 1 節　調査に至る経緯……1

第 2 節　調査の方法と経緯……3

第 2 章　遺跡の位置と環境

第 1 節　遺跡の位置と地理的環境……4

第 2 節　歴史的環境……10

第 3 章　発見された遺構と遺物

第 1 節　遺跡の概要……13

第 2 節　調査の概要……14

第 3 節　遺構……14

第 4 節　遺物……25

第 4 章　まとめ……33

挿図目次

第1図　鳴井上遺跡の位置図 ……2
第2図　鳴井上遺跡の位置 ……5
第3図　鳴井上遺跡の位置と地形 ……6
第4図　遺跡周辺の地形区分図 ……7
第5図　周辺の遺跡 ……8
第6図　鳴井上遺跡 調査区位置図 ……11
第7図　第99号住居跡実測図 ……15
第8図　第99号住居跡出土遺物実測図(1) ……15
第9図　第99号住居跡出土遺物実測図(2) ……16
第10図　鳴井上遺跡の範囲 ……17
第11図　鳴井上遺跡調査区 ……19
第12図　調査区全体図 ……22
第13図　遺構実測図(1) ……23
第14図　遺構実測図(2) ……24
第15図　縄文土器実測図(1) ……27
第16図　縄文土器実測図(2) ……28
第17図　縄文土器実測図(3) ……29
第18図　石器実測図(1) ……30
第19図　石器実測図(2) ……31
第20図　出土遺物実測図 ……33

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表 ……9
第2表　出土遺物石器観察表 ……32
第3表　出土遺物観察表 ……33

図版目次

図版一　遺構写真
SK-01　完掘（北から）
SK-02　完掘（西から）
図版二　遺構写真
SK-03　土層断面（東から）
SK-04　土層断面（東から）
図版三　遺構写真
SK-05　土層断面（東から）
SK-06　完掘（東から）
図版四　遺構写真
SK-07　完掘（東から）
SK-11・12・13（東から）
図版五　遺構写真
SK-12～16　完掘（東から）
SK-08・09・10（南西から）
図版六　遺構写真
SK-01　土層断面（南から）
SK-02　土層断面（東から）
図版七　遺構写真
SK-03　土層断面（東から）
SK-04　土層断面（東から）
図版八　遺構写真
SK-05　土層断面（東から）
SK-013・014　土層断面（東から）
図版九　遺構写真
SK-17　完掘（北から）
SK-17　完掘（南西から）
図版一〇 遺構写真
SK-17　完掘（北から）
SK-17　完掘（南から）
図版一一 遺物写真
SK-17　完掘（南西から）
SK-17　完掘（北東から）
図版一二 遺構写真
SK-17　完掘（南西から）
SK-17　完掘（東から）
図版一三 遺構写真
SK-17 内 Pit　完掘（東から）
SK-17 内 Pit　完掘（東から）
図版一四 遺構写真
SK-17 土層断面確認状況（北から）
SK-17 土層断面確認状況（南から）
図版一五 遺構写真
SK-17 土層断面（東から）
SK-17 土層断面（西から）
図版一六 遺物写真
縄文土器 1
図版一七 遺物写真
縄文土器 2
図版一八 遺物写真
縄文土器 3
図版一九 遺物写真
土器・石器
図版二〇 調査後の状況

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

鳴井上遺跡の所在する那須烏山市は、栃木県東部に位置し、東京からは北に約 126 ㎞、県都宇都宮市からは東北東に約 30 ～ 35 ㎞の距離にある。那須烏山市の隣接市町は北西にさくら市、南西に高根沢町、南に西から芳賀町、市貝町、茂木町、北に大田原市、東は茨城県常陸大宮市に接している。

鳴井上遺跡の発掘調査は、栃木県県土整備部烏山土木事務所の計画による、県道 27 号那須黒羽茂木線、那須烏山市下境地区の拡幅工事に伴い実施した。県道 27 号は、栃木県那須郡那須町大字伊王野（国道 294 号交点、道の駅東山道伊王野前）から国道 294 号・那珂川の東を通り、大田原市黒羽地区を経由して南に向かい、芳賀郡茂木町の真岡鐵道真岡線茂木駅に至る主要地方道として、栃木県東部を縦断している道路である。総延長は 63.349 ㎞、実延長は 59.035 ㎞で、栃木県の主要地方道では最も距離が長い県道である。

栃木県生活文化スポーツ部文化振興課（旧栃木県教育委員会文化財課・以下文化財課）では、毎年度、国関係機関や県庁内関係各課等と今後の開発事業の確認・調整のための打合会を実施している。

県土整備部烏山土木事務所では、県道 27 号那須黒羽茂木線の那須烏山市下境地区について拡幅事業が計画され、開発事業の協議が平成 29（2017）年度に行われた。この事業予定地が、鳴井上遺跡の縁辺部に位置していることが打合会や協議の中で確認された。

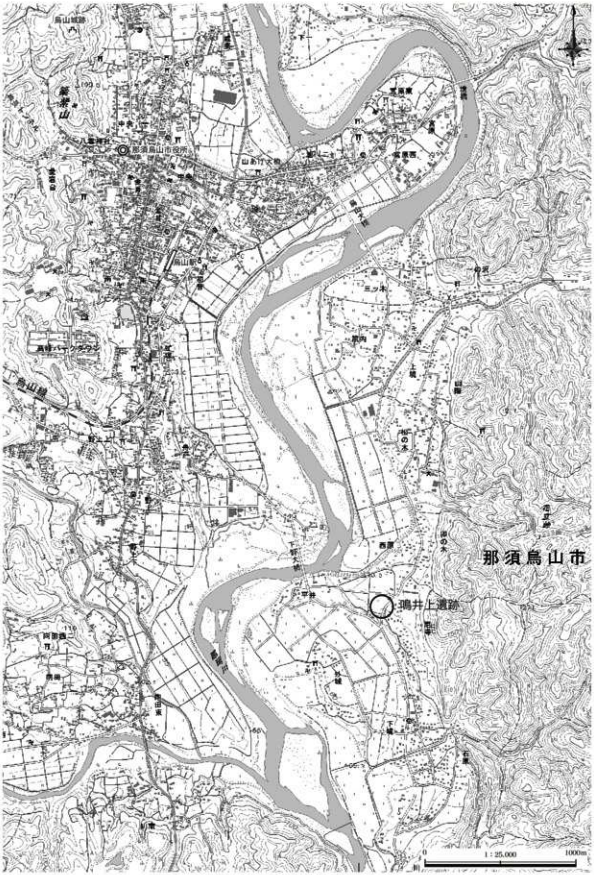
鳴井上遺跡は、栃木県教育委員会が昭和 54（1979）年度及び昭和 57（1982）年度より、それぞれ３ヶ年間の継続事業として実施した、栃木県重要遺跡基本資料整備事業において選出された 200 遺跡の一つであり、本県の北東部を代表する縄文時代中期から晩期にかけての遺跡である。古くは昭和 34（1959）年に宇都宮大学歴史研究会によって発掘調査が行われ、住居跡に伴うと判断される炉跡２基を確認するとともに、出土した縄文時代後期から晩期にかけての土器及び石器等が報告されている。また、鳴井上遺跡は、縄文時代に限らず、台地の一角には那珂川の崖端部を利用して中世の平井城跡がつくられた複合遺跡である。昭和 56（1981）年度には土地改良事業に伴い、烏山町教育委員会が主体となって平井城跡周濠確認調査が実施されている。この調査においても平井城跡にかかわる遺構及び遺物のほかに縄文時代の土器片や石器が出土している。この時点で、広範囲におよぶ縄文集落の存在を想定するものであった。平成 13（2001）年度には重要遺跡として範囲・内容の確認調査を行った。この際の確認調査で縄文時代の大規模な集落遺跡であり、さらに古墳から平安時代にかけても集落遺跡が存在することが確認されている（栃木県 2003）。

これらのことをふまえ、平成 30（2018）年２月に文化財課と烏山土木事務所により、事業予定地の鳴井上遺跡にかかると思われる箇所について所在調査を実施したところ、土器片等が散布することが確認されたことにより、事業予定地における確認調査および工事立会が必要と判断された。

令和２（2020）年になり、事業予定地の用地買収等が進められた結果、確認調査の実施が可能となったため、令和２（2020）年５月に文化財課が確認調査を実施した。その結果、表土等からは多数の縄文土器、土師器や須恵器が出土し、竪穴住居跡と思われる遺構や土坑等の遺構プランを確認した。このため、工事の実施前には記録保存のための発掘調査が必要という判断となった。

なお、県道東側の拡幅部でも買収に伴い、令和２（2020）年 11 月に確認調査を行ったが、こちら側では遺構等は確認できず、工事の着工が可能と判断された。

確認調査の結果を受けて、文化財課と道路整備課で調整を行い、現地での工事が令和２年度末より予定され



第1図　鳴井上遺跡の位置図

たため、現地での発掘調査を早急に進めることとなった。

文化財課は公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター（以下センター）に対し、令和２（2020）年８月17日付けで「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の費用見積について（依頼）」を発し、これを受けてセンターは、８月17日付けで「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の費用見積について（回答）」において発掘調査に係る積算額を算出して提出した。その後、文化財課より令和２（2020）年９月１日付けで「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の委託契約の締結について（依頼）」があり、９月１日付けの「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の委託契約の締結について（回答）」により委託契約を締結した。契約額は委託料 8,200,000 円（うち消費税及び地方消費税の額 745,454 円）である。

委託契約締結後、発掘器材の準備、発掘届けの提出、作業員の任用、プレハブ等器材の賃貸借などの準備作業の後、発掘調査を開始し、11 月末に現地での発掘調査を終了した。

発掘調査において、遺構数が当初見込まれた数量より少なかったため、作業員数の減少などにより委託料を減額する必要が生じた。これにより文化財課より、令和３（2021）年２月８日付けで「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の費用見積について（依頼）」があり、センターは、２月８日付けの「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の費用見積について（回答）」で減額の積算額を提出した。その後、文化財課より令和３（2021）年２月８日付け「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(鳴井上遺跡）の変更契約の締結について(依頼）」があり、２月８日付けの「令和２（2020）年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の変更契約の締結について（回答）」により、委託料 5,505,000 円（うち消費税及び地方消費税の額 500,454 円）で変更契約を締結した。

整理作業は県土整備部の他の事業と調整しながら進めることとなったため、調査終了からやや期間を空けることとなったが、栃木県生活文化スポーツ部文化振興課（以下文化振興課）より令和５年４月３日付けで「令和5(2023) 年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）の費用見積について（依頼）」があり、センターは４月３日付けで令和５年４月３日付け令和5(2023) 年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(鳴井上遺跡）の費用見積について（回答）」により発掘調査に係る費用の積算額を提出した。

この費用の積算額の提出後、文化振興課より４月３日付けで「令和5(2023) 年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）委託業務の受託及び契約の締結について（依頼）」があり、「令和5(2023) 年度県土整備部事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鳴井上遺跡）委託業務の受託及び契約の締結について（回答）」により委託契約を締結した。契約額は委託料 4,499,000 円（うち消費税及び地方消費税の額 409,000 円）である。

令和５年４月より整理作業を開始し、遺構平面図等整理作業と図版作成、出土遺物の洗浄作業・復元作業や実測作業、図版作成作業を行い、報告書の編集等の作業をすすめ、令和６年３月には発掘調査報告書を刊行し、全体の事業を終了した。

第２節　発掘調査の方法と経緯

発掘調査は、県道の拡幅工事に伴うもので、調査区は幅が狭く細長くなっている。県道は交通量が少なく、調査区が道路より高い位置にあるため、安全柵の設置などの対策は行わなかった。調査区と県道との比高差が1m～3m 有り表土除去に使用する重機の搬入が困難なため、隣接する畑地からの搬入となったが、周辺の畑地には農作物が作付けされており、重機の搬入が困難であった。このため、農作物の収穫を待って重機の搬入を行った。

表土除去作業は重機を使用して遺構の確認できる面まで掘削した。調査区北側１区ではローム面までの掘削により、遺構の確認を行ったが、調査区１区の南側ではロームの上面で遺構の確認ができた。調査区２区では遺構の確認はなかった。

表土除去後に作業員による遺構の掘り込みを行った。作業の進捗に合わせ、写真撮影や遺構の土層断面、平面図等記録類の作成を実施した。

第2章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

栃木県は関東平野の北部、いわゆる北関東の中央に位置し、北は福島県、西は群馬県、南は群馬県と埼玉県、東は茨城県に接する内陸県である。地形的に概観すると東部山地、中部低地、西部山地に大別され、また南流する河川を含めた全体の形状は、南に開けた地形を呈している。

このような中、鳴井上遺跡が所在する那須烏山市は、栃木県の東部に位置しており、西は高根沢町、北はさくら市・那珂川町、南は市貝町・茂木町、東は茨城県常陸大宮市に接している。

那須烏山市は、行政主導による平成の町村合併により、平成 17（2005）年 10 月１日に那須郡烏山町と南那須町が新設合併により発足した。そもそも烏山町自体は昭和 29（1954）年に烏山町、七合村、境村そして向田村の４町村合併により成立した町であり、南那須町は、昭和 29（1954）年に下江川村と荒川村の２村が合併してできた町である。鳴井上遺跡は平成の合併前の旧烏山町に所在している。

那須烏山市の近年の人口は約 2.3 万人前後を推移している。県都として本県の中央部に位置する宇都宮市からはほぼ真東にあたり、市の北部を東西に国道 293 号が通り、市の中央を福島県会津若松市と千葉県柏市を結ぶ国道 294 号が南北に通っており、これに主要地方道宇都宮－烏山線及び烏山－御前山線が東西方向で直行する。また、JR 東北線の宝積寺駅からは JR 烏山線が分岐し、市内に５つの駅があり、県都宇都宮まで約 32 ㎞を約１時間で結んで烏山駅が終着となる。

遺跡周辺の地形を概観すると、先ず目に付くのは県境に沿って南北に連なる東部山地、いわゆる八溝山地である。これらは北から八溝山塊・鷲子山塊・鶏足山塊及び筑波山塊の４山塊に分かれており、最高峰は八溝山塊に位置する 1,022m の八溝山である、八溝山塊の高度がおおよそ 600 ～ 1,000m であり、鷲子山塊が 400 ～ 500m、鶏足山塊が 300 ～ 500m であることから、順次南下するに従って低くなることが理解される。

次は、那須岳に源を発する那珂川である。余笹川、箒川及び荒川と幾つもの小河川が一つとなって、八溝山地を横断して一気に茨城県ひたちなか市へと下る河川である。山脈や山地を横断する際に形成された谷を横谷と呼んでいるが、南に隣接する茂木町飯野付近では那珂川の河床面の標高が 40 ～ 50m 程であることから、那珂川は八溝山地を 150m 以上も削ったことになる。現在では水量が減少しているが、以前には小舟を利用した上下流域との往来が盛んに行われており、橋が架かる昭和 10 年以前には数多くの「渡し」が設けられていた。また依存度は少ないものの鮭や鮎を中心とした内水面漁業の発達は、人々の生活に那珂川が大きく関係していたことを今に伝えている。

那須烏山市周辺の気候は内陸のため寒暖の差が大きく、冬の最低気温は -5°C 程度にまで下がり、夏の最高気温は 30°C 以上にもなる。また冬は空気が乾燥し、夏は湿度が高く年間の降水量は比較的多い。さらに、

冬には「那須颪」と呼ばれる強い空っ風が吹き下ろし、夏には雷雨が多いという特色がある。しかし、春秋の気候は穏やかで、春の新緑や秋の紅葉、さらには山菜や茸、鮎などの山や川の恵みが豊富であり、いたって過ごしやすい環境にある。山地は大部分が林地として利用されているが一部には畑地や果樹園もみられ、丘陵は広葉樹林や針葉樹林として利用されるほかに畑地・果樹園が多く、また地形の特徴を活かしたゴルフ場も多く開発されている。川沿いの台地や低地は畑地や水田として利用され、町並みが形成されるなど、まさに生活の中心となっている地形である。

このような中、鳴井上遺跡は烏山町中心部から直線距離にて約 2Km 南東に位置し、那珂川を直下に見下ろす左岸台地上に広がっている。台地中心部の標高は 78m 前後であり、台地西側の崖線部分における那珂川の水位面との比高差は約 25m を測る。これらの台地は蛇行する那珂川に付随することから、八溝山地の裾部分が那珂川によって開折された際に形成されたことを物語っている。

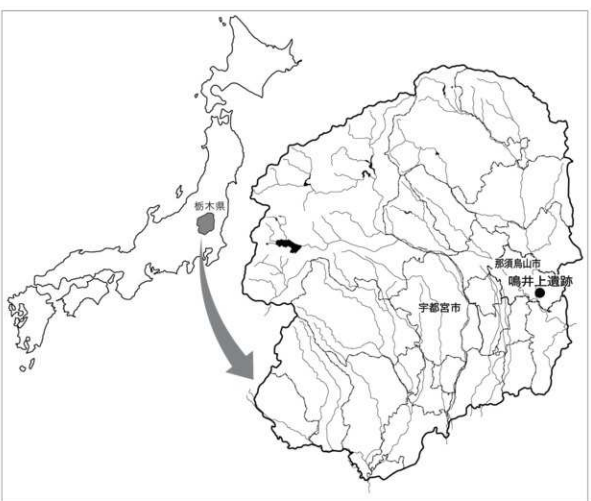
《主要文献》

阿久津純　1976「第一章　栃木県の地形・地質（県中北部を中心に）」『資料編・考古一』栃木県史編さん委員会

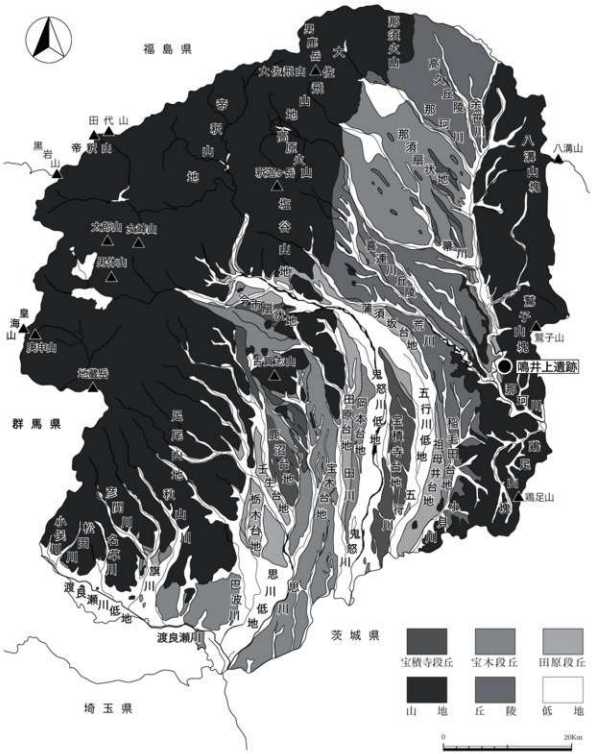
相馬一夫　1997「第２章　遺跡の位置と環境」『滝田本郷遺跡』栃木県教育委員会　（財）栃木県文化振興事業団

栃木県企画部資源対策課　1988『土地分類基本調査　烏山・常陸大宮』栃木県

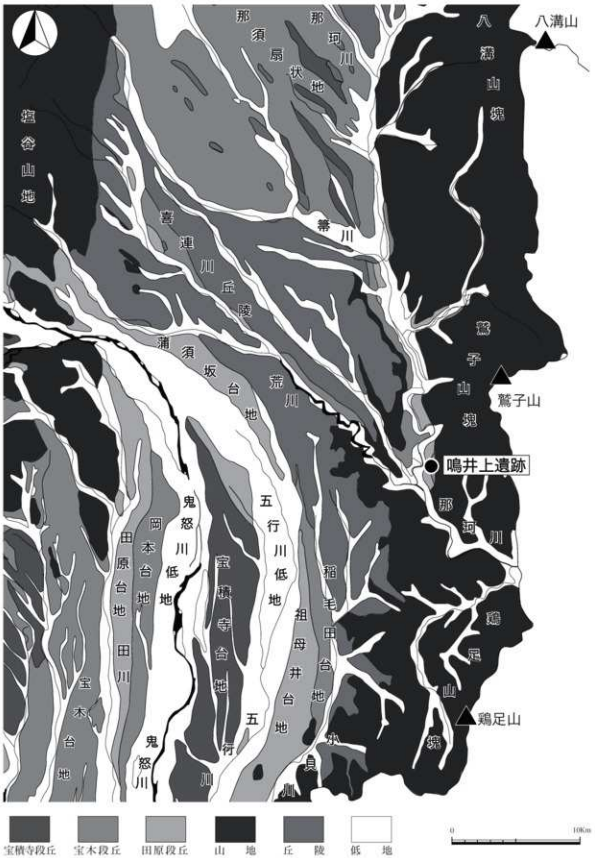
濱野義則　1995「第二章　茂木の地形」『茂木町史　第一巻　自然・民俗文化編』茂木町史編さん委員会



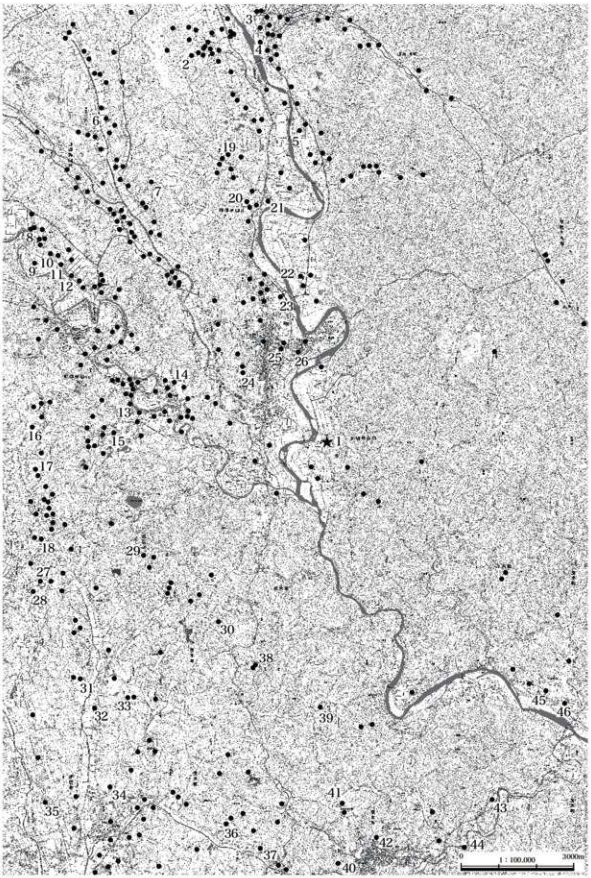
第2図　鳴井上遺跡の位置



第3図　鳴井上遺跡の位置と地形



第４図　遺跡周辺の地形区分図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
1：100,000
3000m

第５図　周辺の遺跡

第1表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	備考・参考文献
1	鳴井上遺跡	下境・鳴井上	集落跡	縄文	昭和 34 年発掘 早都宮大学歴史研究会 1960「栃木県那須烏山町下境鳴井上遺跡調査報告」
2	大久保城跡	小川町大字白久字久保	城跡	中世	町指定「滝補改訂小川町の遺跡」
3	川崎古墳	馬頭町大字久那 1071	古墳	古墳	昭和 62・63 発掘 大川清　1989「栃木県馬頭町古墳石室調査報告書」馬頭町教育委員会
4	永堀遺跡	馬頭町大字久那 544	古墳	古墳	「栃木県埋蔵文化財保護行政年報」
5	松野遺跡	馬頭町大字松野上中	集落跡	縄文・古墳・奈良	「馬頭町史」
6	古沢遺跡	南那須町大字志鳥 605	散布地	奈良・平安中世	平成 3・5 年発掘 木下実・川辺均 1992「古沢遺跡」南那須町教育委員会 木下実 1994「古沢遺跡（2）」南那須町教育委員会
7	鐵神塚群群	南那須町大字熊田字鐵神	墳群	平安	平成元年発掘 木下実 1992「鐵神塚群群」南那須町教育委員会
8	原塚古墳群	南那須町藤田字原後	古墳	古墳	円墳 3 基「南那須町史」
9	三百目遺跡	南那須町藤田	集落跡	古墳・奈良・平安	昭和 60 ～ 61 年発掘 大金宣亮 1994「三百目遺跡」
10	久保前古墳群	南那須町藤田字久保前	古墳	古墳	円墳 1 基「南那須町史」
11	大和久古墳群	南那須町大和久 956	古墳	古墳	昭和 34・59 年発掘：消失 円墳 2 基 池上悟・遠藤政孝 1987「大和久古墳群発掘調査報告書」 南那須教育委員会
12	林先古墳群	南那須町大和久字林先	古墳	古墳	前方後円墳 2 基　円墳 4 基「南那須町の遺跡」
13	万行下遺跡	南那須町大里字万行下	散布地	古墳	円墳 1 基「南那須町の遺跡」
14	若林遺跡	南那須町大字森田字若林 1348-1	散布地	奈良・平安・中世	平成元年発掘 木村喜一・木下実 1990「若林遺跡」南那須教育委員会
15	嶋間遺跡	南那須町曲田字嶋間 34	散布地	古墳・中世	昭和 61 年発掘 海老原邦雄・藤本理広 1987「嶋間遺跡」南那須教育委員会
16	金堀塚古墳群	南那須町曲畑字金堀	古墳	古墳	前方後円墳 1 基　円墳 4 基：一部破壊「南那須町史」
17	四ツ塚古墳群	南那須町曲畑字橋本	古墳	古墳	円墳 4 基：一部破壊「南那須の遺跡」
18	曲畑遺跡	南那須町大字曲畑 147	集落跡・古墳	縄文・古墳	「曲畑遺跡（写真図版2）」1999 南那須教育委員会
19	中山横穴古墳	烏山町中山・白坂	横穴	古墳	町指定「烏山町史」
20	慈王丘遺跡	烏山町中山八ヶ平	集落跡	縄文	昭和 33 年発掘
21	八ヶ平遺跡	烏山町中山	集落跡	弥生	昭和 41 年発掘 岡崎文喜・木下正史 1966「栃木県烏山町八ヶ平遺跡調査報告」 南那須教育委員会
22	羽場遺跡	烏山町大字興野	集落跡	縄文	昭和 35 年発掘 早都宮大学歴史研究会 1960「栃木県羽場遺跡調査報告書」
23	滝田本郷遺跡	烏山町大字滝田	集落跡	縄文・古墳・平安	平成 5 ～ 7 年調査 相馬一夫・川原由典他 1997「滝田本郷遺跡」
24	妙光寺遺跡	烏山町金井町妙光寺上	集落跡	縄文	昭和 38 年発掘
25	泉A遺跡	烏山町江野町泉	集落跡	縄文	昭和 36・48 年発掘 烏山町教育委員会 1975「泉遺跡発掘調査報告」 烏山町文化財資料第七集
26	泉B遺跡	烏山町江野町泉	集落跡	縄文	昭和 37 年発掘
27	白鳥塚古墳	芳賀町上稲毛田白鳥塚	古墳	古墳	円墳 2 基
28	七ツ塚古墳群	芳賀町上稲毛田字稲の入	古墳	古墳	前方後円墳 1 基・円墳 6 基
29	長峰横穴墓群	市貝町続谷長峰	古墳	古墳	昭和 55・56 年発掘 久保俊三 1983「長峰横穴群」市貝町教育委員会
30	船平遺跡	市貝町大字舟平田 374・380	散布地	縄文	「栃木県埋蔵文化財保護行政年報」
31	八幡山城遺跡	市貝町石山八幡	散布地・集落跡	縄文・古墳	昭和 53 年発掘 中村紀男 1996「八幡根城遺跡」市貝町教育委員会
32	拝戸尻遺跡	市貝町大字立谷字柳中	散布地	縄文・奈良・平安	昭和 52 年発掘 中村紀男・関沢昇 1979「拝戸尻遺跡」市貝町教育委員会
33	境松古墳	市貝町田野辺字駒塚	古墳	古墳	円墳　発掘調査　旧石工駒塚古墳「市貝町史」
34	諏訪塚古墳群	市貝町鳥谷諏訪	古墳	古墳	昭和 53 年発掘　1 号墳町指定 関沢昇 1979「諏訪塚古墳実測報告」「塚越古墳」 市貝町教育委員会
35	上根二子塚古墳群	市貝町大字上根字二子塚	古墳	古墳	昭和 50 ～ 60 年発掘 小森紀男 1986「芳賀郡市貝町上根二子塚古墳埴輪調査報告書」 「麻考古」第 6 号
36	預原田古墳群	市貝町預原田字塚越	古墳	古墳	昭和 53 年発掘 北井清・関沢昇 1979「塚越古墳」市貝町教育委員会
37	堀込遺跡	市貝町預原田字上坪	散布地	縄文	平成元年発掘 中村紀男・阿部芳郎 1992「堀込遺跡発掘調査研究報告書」市貝町教育委員会
38	千本城	茂木町田字堀畑・石未	城跡	中世	町指定
39	九石古宿遺跡	茂木町九石字古宿	住居跡	縄文	町指定「茂木町史」
40	反田遺跡	茂木町大字坂井字反田	集落跡	縄文	「茂木町史」
41	並松遺跡	茂木町大字坂井字並松 3085-1	石器製造遺構集落跡	石器製造遺構 旧石器・縄文 奈良・平安	「栃木県埋蔵文化財保護行政年報」
42	茂木城	茂木町長崎山	城跡	中世	町指定「茂木町史」
43	松の木遺跡	茂木町大字馬門字松の木	集落跡	縄文	「栃木県埋蔵文化財保護行政年報」
44	源土原遺跡	茂木町麻子源土原	散布地	旧石器	「茂木町史」
45	河原台遺跡	茂木町大字山内字河原台	住居跡	縄文～歴史	平成 2 年発掘 中村紀男 1994「河原台」茂木町教育委員会
46	鳴平遺跡	茂木町大字山内字鳴平 300-1 ～ 302-1	集落跡	縄文	平成 2・6 年発掘 後藤信祐・谷中隆 1994「鳴平遺跡 I」 川原由典・菊池正治・後藤信祐 1995「鳴平遺跡 II」

第２節　歴史的環境

鳴井上遺跡が位置する那須烏山市及び隣接する市町では、教育委員会による精密な遺跡位置図の作成、また市町村史の発刊に伴って細やかな分布地図が作製されており、埋蔵文化財包蔵地への対応や理解が非常に充実した地域である。これらの分布図をもとに周辺の遺跡を概観すると、第５図からも明らかなように、本流となる那珂川やこれに流れ込む数多くの支流域の段丘及び丘陵上の多数の遺跡が存在していることが窺える。

今回は、鳴井上遺跡を中心に据えて東西 15.5Km、南北 23Km 内に分布する遺跡をドットにて掲載すると、この範囲内では北から順に那珂川町 65 遺跡、那須烏山市 221 遺跡、芳賀町３遺跡、市貝町 59 遺跡、茂木町 32 遺跡となる都合 380 遺跡が判明しており、隣接する茨城県美和村（現ひたち大宮市）の８箇所を含めると総計 388 遺跡を数える。なお、これらの中で過去に発掘調査等が行われて内容が判明し、また本遺跡と時期及び特徴が類似する遺跡の幾つかについては、１～46 の番号を付して第３表の周辺の遺跡一覧表で説明することとした。

鳴井上遺跡は、縄文時代中期中葉～晩期、そして古墳時代後期から奈良・平安時代という大きく二つの時代が確認されているが、特にここでは鳴井上遺跡の主な時代である縄文時代の遺跡について注目することとした。

先ずは、当該地域においては辰巳四郎を中心とする宇都宮大学歴史研究会による功績が挙げられる。「栃木県東部地域における縄文文化様相の究明」を目的に行われた発掘調査は、昭和 33（1958）年 富士丘遺跡（20）、同 34（1959）年 鳴井上遺跡（1）、同 35（1960）年 羽場遺跡（22）、同 37（1962）年 泉遺跡（25･26）、同 38（1963）年 妙光寺上遺跡（24）であり、調査面積は僅少であったものの多くの成果が得られている。

遺跡を時代順により述べていくと、早期では妙光寺上遺跡（24）があげられる。出土土器に撚糸文系･田戸下層式･子母口式及び押型文土器等のほか、石器類では掻器・短冊形石斧及び敲石等があり、これに押型文土器との伴出関係が注目できる鍬形鏃が出土している点は特筆される。次は前期の遺跡として富士丘遺跡（20 現在の七合中学校敷地）があり、ここでは当地域おいて極めて稀少な諸磯式の住居跡が確認されていることがあげられる。出土土器は諸磯ｂ式と浮島式が出土しており、おそらく本県において両者の共伴が初めて確認できた遺跡と思われる。石器には石鏃・石匙・石錘・石斧及び磨石・凹石のほかに、土製品の耳飾りがある。中期以降の遺跡はこれまで市内各地にて多数発見されており、特に後期～晩期を中心とする遺跡は那珂川沿いの段丘上に多く分布していることが判明している。泉遺跡（25・26）は中期から後期の遺跡で、昭和 36（1961）年に烏山高校郷土史研究部が、翌年の昭和 37（1962）年に宇都宮大学史学研究室が、さらに昭和 48（1973）年に烏山町教育委員会が発掘調査したところ、加曽利Ｅ式・称名寺式・安行１式及び加曽利Ｂ式にかかわる土器が発見されている。羽場遺跡（22）の発掘調査は鳴井上遺跡の調査の翌年にあたり、径 6.5m の楕円形を呈する中期末の住居跡１軒と埋甕３基の発見と併せて多量の遺物が出土している。土器では中期前半～晩期にかかる各土器型式が確認され、特に後期後半の新地式や晩期の安行 3a 式・大洞Ｂ式及びＡ式が、またこれらと共伴する各種石器類や土偶・土錘及び土製円盤等が豊富に出土している点は注目される。おそらく当時においても、当地域における縄文時代後・晩期の解明のため、前年の鳴井上遺跡との関連を考える上で、羽場遺跡に着手したものと推測できる。

次の弥生時代では、郷土史家の義煎平佐氏発見による八ヶ平遺跡（21）がある。昭和 41（1966）年には岡崎文喜氏らが発掘調査を実施したが、十分な成果は得ることはできなかった。

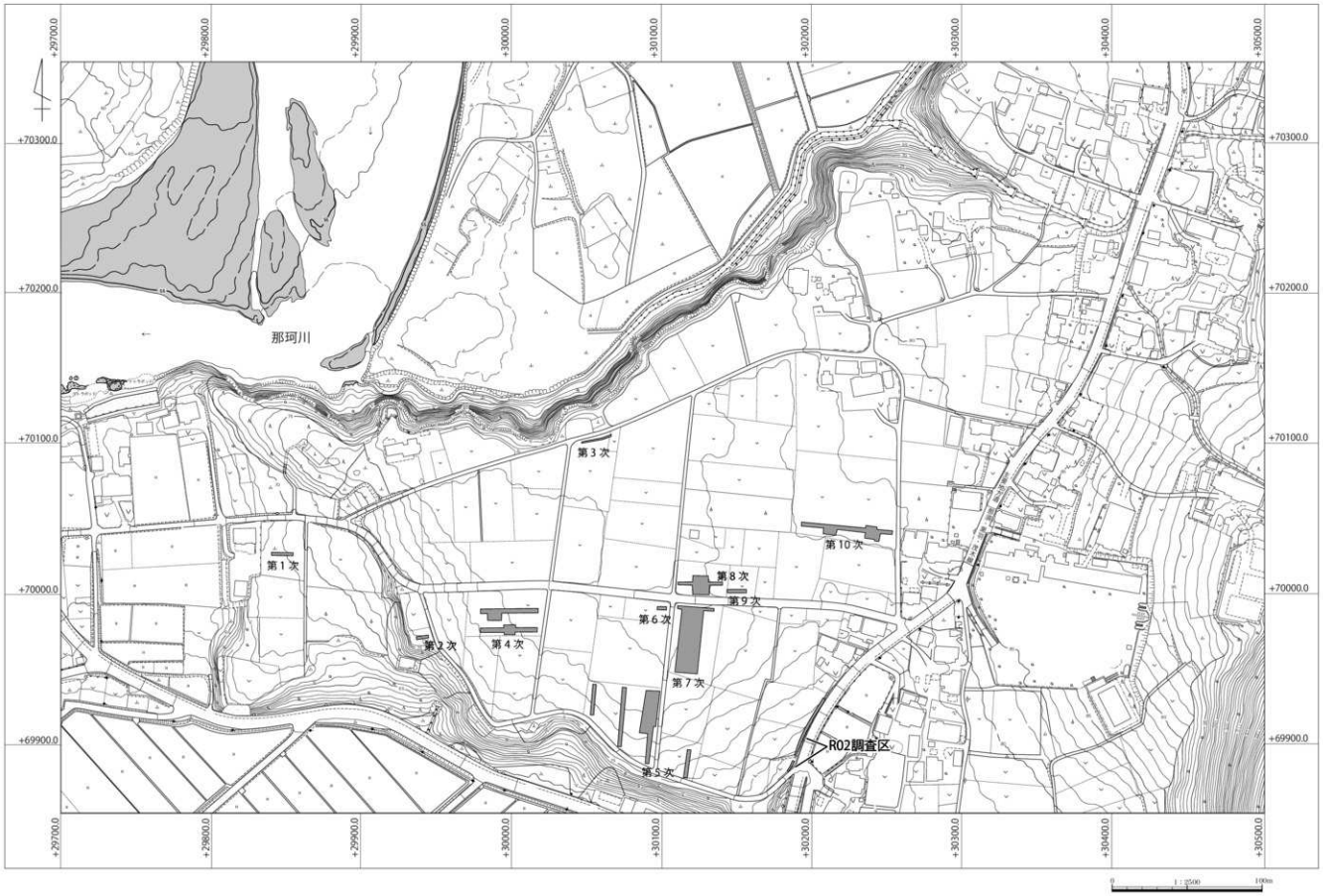
《主要参考文献》

相馬一馬　1997『滝田本郷遺跡』栃木県教育委員会　財団法人とちぎ生涯学習文化財団

栃木県史編さん委員会　1976「宮原遺跡　泉遺跡　羽場遺跡　八ヶ平遺跡」『栃木県史』栃木県史資料編　考古一

塙静夫・大和久震平　1972『栃木県の考古学』吉川弘文館

上記以外については、「第３表　周辺の遺跡一覧表」の備考・参考文献に記載しているので参照されたい。



第6図　鳴井上遺跡 調査区位置図

第3章　発見された遺構と遺物

第1節　遺跡の概要

確認調査の成果

鳴井上遺跡は前章で述べたように、昭和 57（1982）年に栃木県教育委員会により重要遺跡 200 の一つに選出されており、栃木県北東部を代表する縄文時代後・晩期を主体とする遺跡として理解されている。その後、平成 12（2000）年度（第１次～第３次調査）、平成 13（2001）年度（第４次～第 10 次調査）において県の重要遺跡として遺跡の範囲と内容の確認調査を行った結果、下記の成果が報告されている。

1 縄文時代中・後・晩期の遺跡として周知されていたが、新たに古墳時代後期から平安時代にかけての集落の存在が明らかになった。また、遺跡の載る台地の一角には中世の平井城が造られており、これにより大きく3時期からなる遺跡であることが判明した。

2 縄文時代の遺構は竪穴住居跡と土坑が中心で、縄文時代中期前葉の阿玉台式から晩期中葉の大洞Ｃ２式の時期にあたることが確認できた。表土中より出土した土器には、これらの時期を前後する前期の花積下層式・関山式及び諸磯ａ式、また晩期終末の大洞Ａ式やA′式、さらに弥生式土器に該当する土器も散見できたことからこれらに関係する遺構の存在も予想させる。

3 第6次及び第8次調査区からは、縄文時代後期後半～晩期中葉の時期にあたる竪穴住居跡をまとまって確認している。特に、第 99 号住居跡からは、多量の大洞系の土器とともに、石剣、石棒、独鈷石、土偶、スプーン形土製品など注目すべき遺物が出土している。当該時期にあっては本県における一級の遺構である。

4 縄文時代の集落は、第　図で示したように、台地中央部の浅い谷を境にしてその西側の平坦部部分に広がり、およそ 200m × 200m の範囲におよぶ。中期前半～後期初頭と後期後半～中期中葉の二つの時期では遺構の構築場所が明らかに異なり、前者は遺構範囲内の全面に、後者は第７次・第８次調査区と★印（宇都宮大学歴史研究会調査地点）を径とする約 100m の範囲内にほぼ収束すると思われる。

5 新たに存在が明らかとなった古墳時代後期～平安時代の集落は、台地全面に広がると考えられるが、東側については今回の調査対象から外れており、境界ラインを明示するにはいたらない。

6 以前の平井城は三方に土塁と濠がめぐる立派なものであったが、昭和 56（1981）年の圃場整備事業によって埋設保存されることにより、現状においては、その位置を特定することができない。しかし、第3次調査区を濠の末端部に設定したことにより、本来の位置関係を図上に記入できた。また、平井城西側の一段低い面に設定した第４次調査区からは、南北方面に掘り込まれたほぼ同規模の濠が出土している。これまで単郭として理解されていたが、附属する施設が存在した可能性が推定できる。

第 99 号住居跡

上記の成果３の縄文晩期の住居跡である。住居跡の東壁の全てとこれにかかわる南北両壁の一部が調査区域外のため、全体の形状は不明であるが、おおよその推定で長軸 7.2m 前後を測る隅丸方形を呈すると考えられる。住居跡の北側コーナー部にかかる 1/4 程を調査した。重複関係の遺構も無く、住居跡の形状や床面などの状態を明瞭に確認することができた。確認面からの掘り込みは比較的浅く、最大の中央部で約 20 ㎝程度である。10 ㎝に満たない壁高を含めた断面形状は皿状に近い。床面には目立った凹凸は見られず、中央に向かって皿状に傾斜するものの、ほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。確認できた６基のピットは住居跡に伴う壁柱穴である。

出土遺物は僅かな調査範囲であったにもかかわらず、極めて多量に出土している。土器では、大洞式系の精製土器及び粗製土器が大半を占める。また、石器も多く出土しているが、土偶、土製円盤、ミニチュア及びスプーン形等の土製品が出土している点も特筆できる。

第２節　調査の概要

今回の鳴井上遺跡の発掘調査箇所は、確認調査で推定した古墳時代から平安時代の遺跡範囲より外側に位置しているが、上記の確認調査の成果５にあるように、推定範囲は明示できていない。調査箇所は遺跡推定範囲の南東にあり、入り込む谷に面した台地の縁辺部にあたるため、遺跡の範囲が広がる可能性が考えられた。このため、文化財課により確認調査が行われ、遺構の検出と遺物の出土があることから発掘調査の対象となった。

調査は道路の拡幅工事に伴うもので、南北に細長く限られた調査区となっている。調査区は、北側から１区として約 42.5m の長さで 2m 前後の幅で設定。段差のある斜面地の約 3.5m の部分は間隔を空けて、２区を約 8m の長さで 2m 前後の幅とし、２箇所に調査区を設定した。

１区は北側の地表面と南側の地表面の高低差が約 0.6m であり、ほぼ平坦である。検出できた遺構は、土坑、小ピット計 17 基である。遺構からの遺物の出土はあまり無かったが、１区の南側の遺物包含層から縄文土器、土師器、須恵器の破片が出土している。

第３節　遺構

SK-01（第 14 図、　図版一・六・一六）

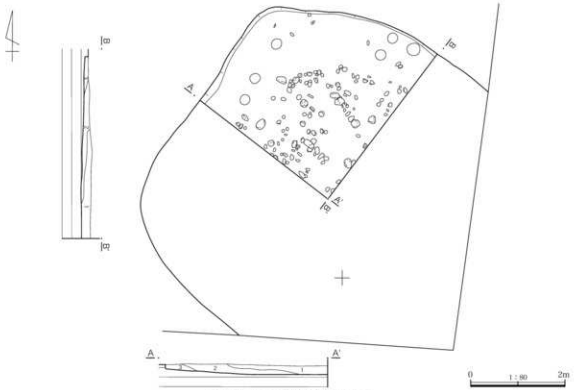
調査区の最も南側に位置する。南北に長い長方形を呈しており、主軸は N-26°-E である。長径 2.04m、短径 0.78m、確認面からの深さ 0.30m を測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は１層である。縄文土器が出土しており、４点図示した。

SK-02（第 14 図、　図版一・六・一六）

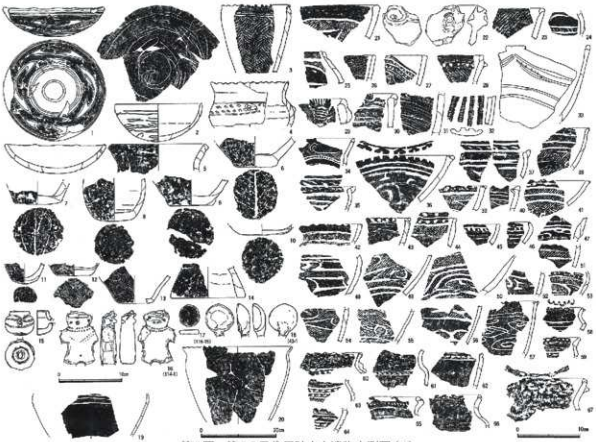
SK-01 の北側に位置する。東西に長い長方形を呈しており、主軸は N-72°-W である。長径 0.96m、短径 0.60m、確認面からの深さ 0.31m を測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は１層である。縄文土器が出土しており、２点図示した。

SK-03（第 14 図、図版二・七）

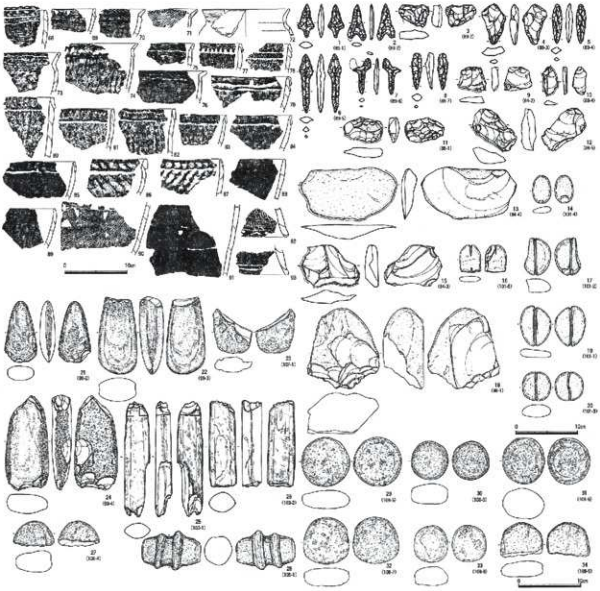
SK-02 の北側に近接して位置する。西側が調査区外であるが、東西に長い長方形を呈していると思われ、主軸は N-68°-W 前後と推定される。短径 0.62m、確認面からの深さ 0.16m を測り、測定可能な長径は 0.55m である。主軸は N-68°-W 前後と推定される。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は１層である。遺物は出土していない。



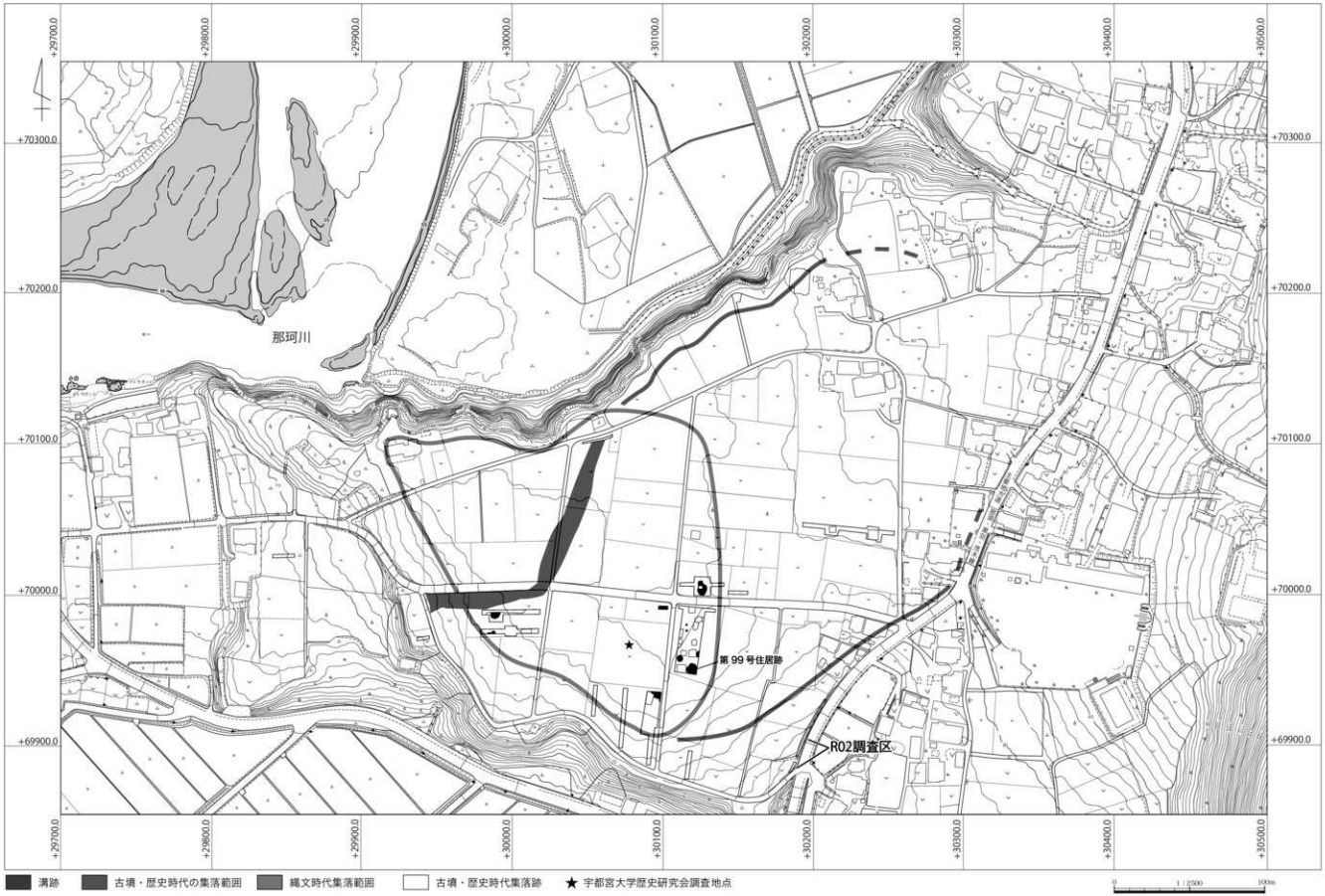
第7図　第99号住居跡実測図



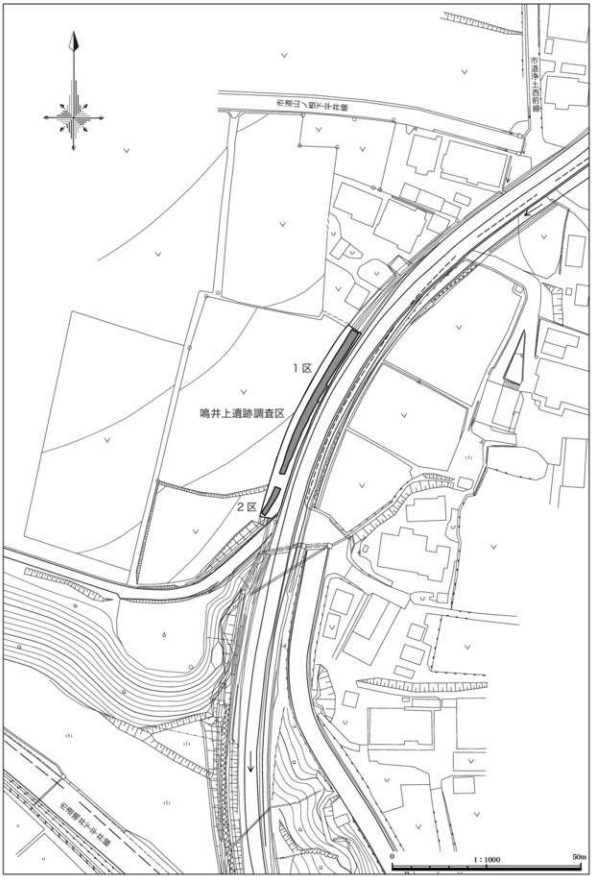
第8図　第99号住居跡出土遺物実測図（1）



第9図　第９９号住居跡出土遺物実測図（２）



第10図　鳴井上遺跡の範囲



第11図　鳴井上遺跡調査区

SK-04（第 14 図、図版二・七）

調査区のほぼ中央に位置する。西側が調査区外のため全体の形状を伺い知ることはできないが、円形を呈すると思われる。現状で計測できる長径 0.58m、短径 0.20m、確認面からの深さ 0.11m を測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。南側が SK-17 と重複しており、SK-17 が新しい。

SK-05（第 13 図、　図版三・八）

SK-04 の北側約 2.0m に位置する。西側が調査区外であるが、西側が調査区外のため全体の形状を伺い知ることはできないが,円形を呈すると思われる。現状で計測できる長径は 0.75m、短径 0.28m、確認面からの深さ 0.17m を測る。底面は丸みを帯び、壁は湾曲し大きく開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK-06（第 13 図、　図版三）

SK-05 の北側約 3.0m に位置する。形状は円形を呈する。長径は 0.26m、短径 0.25m、確認面からの深さ 0.26m を測る。底面は丸みを帯びており、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK-07（第 13 図、図版四）

SK-06 の北側約 1.0m に位置する。形状は楕円形を呈する。長径は 0.25m、短径 0.21m、確認面からの深さ 0.47m を測る。底面は丸みを帯びており、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK-08（第 13 図、図版四）

調査区北端から約 5.0m に位置する。形状は不整形を呈する。長径は 0.31m、短径 0.29m、確認面からの深さ 0.31m を測る。底面は丸みを帯びており、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK-09（第 13 図、図版四）

SK-08 の東側に近接して位置する。形状は不整形を呈する。長径は 0.29m、短径 0.22m、確認面からの深さ 0.11m を測る。底面は丸みを帯びており、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK-10（第 13 図、図版四）

SK-08、SK-09 の北側に隣接して位置する。形状は楕円形を呈する。長径は 0.45m、短径 0.39m、確認面からの深さ 0.16m を測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK-11（第 13 図、図版五）

調査区北端から約 3.0m に位置する。形状は不整形を呈する。長径は 0.67m、短径 0.52m、確認面からの深さ 0.25m を測る。底面は段を持ち、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。北側が SK-12 と重複しているが、新旧関係は不明である。

SK-12（第 13 図、図版五・一六）

SK-11 の北側に位置する。西側は調査区外であるが、不整な円形を呈する。短径 0.46m、現状で計測できる長径 0.50m、確認面からの深さ 0.23m を測る。底面は狭く、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は２層である。縄文土器が出土しており、２点図示じた。北側が SK-13 と重複しており、SK-13 が新しい。

SK-13（第 13 図、図版五）

SK-12 の北側に位置する。西側は調査区外であるが、不整な円形を呈する。現状で計測できる長径 0.48m、短径 0.31m、確認面からの深さ 0.33m を測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は２層である。遺物は出土していない。

SK-14（第 13 図、図版五）

調査区北端から約 1.5m に位置する。西側は調査区外であるが、不整な円形を呈すると思われる。現状で計測できる長径 0.30m、短径 0.18m、確認面からの深さ 0.41m を測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は２層である。遺物は出土していない。

SK-15（第 13 図、図版五）

SK-14 の東側に近接して位置する。不整な円形を呈する。長径は 0.25m、短径 0.22m、確認面からの深さ 0.11m を測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は１層である。遺物は出土していない。

SK-16（第 13 図、図版五）

SK-15 の北側に近接して位置する。不整な円形を呈する。長径は 0.28m、短径 0.25m、確認面からの深さ 0.11m を測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は１層である。遺物は出土していない。

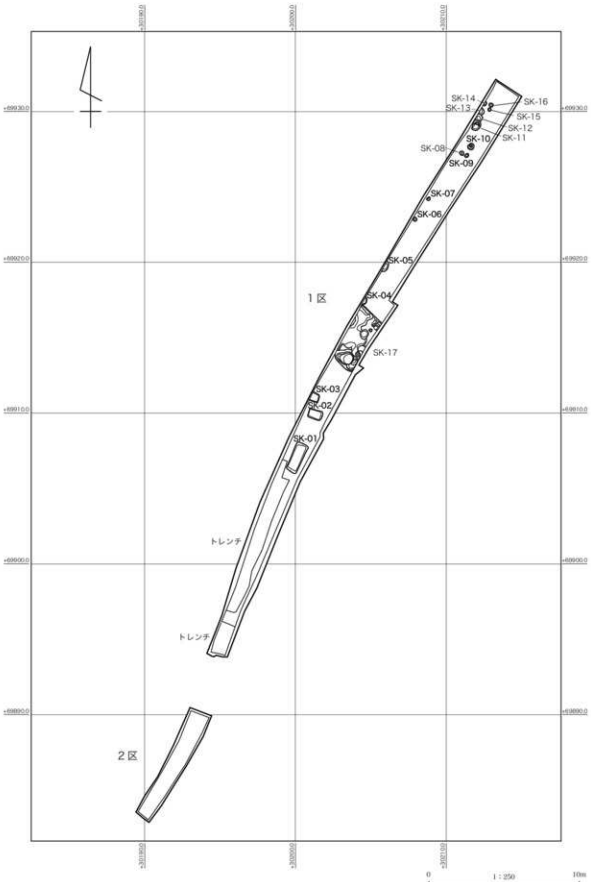
SK-17（第 14 図、図版九～一六・一九）

調査区のほぼ中央、SK-04 の南側に位置する。遺構確認時には、竪穴住居跡の可能性が考えられたが、遺構の埋土を除去したところ、幾つかの遺構が重複して掘り込まれている状況が確認できた。調査時の状況では各遺構の形状などが不明であったため、便宜上一つの遺構として取り扱うこととした。

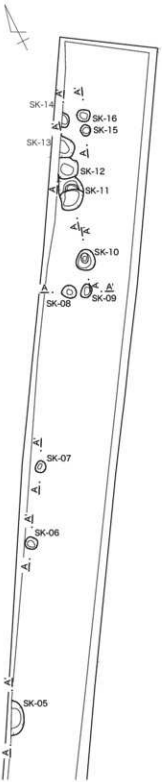
遺構の西側には、遺構の北側から約 0.7m の位置から南北幅約 0.8m で遺構確認面からの深さ約 0.4m の位置に高く残っている部分がある。遺構の東側では、遺構確認面から約 0.4m から 0.5m の北側から南側に向かって若干低くなる、高い箇所がある以外は、全体的に一段掘りこまれた状況がみられる。土坑を除く全体的な覆土は人的な埋め戻しと考えられる。

南側中央には底面がほぼ平坦で壁が少し開きながら立ち上がる不整な円形の土坑が掘られている。現状では長径約 1.2m、短径約 0.8m、深さ約 0.4m を測る。覆土は自然堆積と考えられるが、土坑上面は他の遺構に切られており、別の覆土が堆積している。

南東に平面の形状が不整形な土坑が掘りこまれている、現状での径は約 1.0m、深さ 0.6m を測る。底面や壁面の不整な形状である。覆土は人為的に埋め戻されたと考えられる。縄文土器と須恵器が出土しており、縄文土器２４点、須恵器甕1点、坏1点を図示した。


SK-14
SK-13
SK-16
SK-15
SK-12
SK-11
SK-10
SK-08
SK-09
SK-07
SK-06
SK-05
SK-04
1区
SK-17
SK-03
SK-02
SK-01
トレンチ
トレンチ
2区
0
1:250
10m

第12図　調査区全体図



SK-05
1　オリーブ褐色土　φ5～10mm ロームブロック多く含む

SK-06
1　褐色土　φ1mm 前後のローム粒少量、φ10～30mm のロームブロック微量含む

SK-07
1　褐色土　φ2～5mm ローム粒多く含む

SK-10
1　褐色土　φ1～5mm ローム粒少し含む

SK-12
1　褐色土　φ1～2mm ローム粒少量、10～20mm ロームブロック微量含む
2　褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む

SK-13
1　褐色土　φ1～2mm ローム粒微量含む
2　褐色土　φ2～3mm ローム粒・φ5～10mm ロームブロック多く含む　しまりなし

SK-14
1　褐色土　φ1～2mm ローム粒微量含む
2　褐色土　φ2～3mm ローム粒・φ5～10mm ロームブロック多く含む　しまりなし

SK-08
1　褐色土　φ2～5mm ローム粒多く含む

SK-09
1　褐色土　φ1～2mm ローム粒少し含む

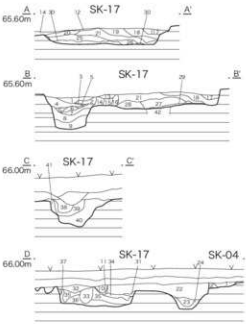
SK-15
1　褐色土　φ1～2mm ローム粒微量含む

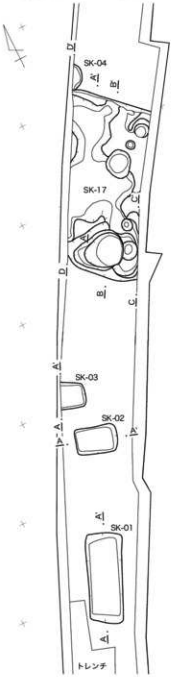
SK-16
1　褐色土　φ1～2mm ローム粒少量含む

第13図　遺構実測図（1）

SK-02
1　褐色土　φ3～5mm ローム粒多く、φ10～30mm ロームブロック少し含む

SK-03
1　暗褐色土　φ2～3mm ローム粒多量、φ5～10mm ロームブロック少量含む





SK-04
1 褐色土　φ2～3mm ローム粒少し含む
2 褐色土　φ2～3mm ローム粒多く含む
A-A'～D-D'
1 褐色土　φ1mm 前後のローム粒微量含む
2 褐色土　φ1～2mm ローム粒少量含む
3 黒色土　ローム粒微量含む
4 褐色土　φ1～2mm ローム粒少し、φ10～30mm ロームブロック若干含む
5 黄褐色土　ローム主体
6 褐色土　φ2～3mm ローム粒少し含む
7 黄褐色土　ローム主体
8 褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む
9 褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む
10 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒少量含む
11 褐色土　φ1～2mm ローム粒・φ5～10mm ロームブロック多く含む
12 褐色土　ローム粒少し含む
13 褐色土　ローム粒少し含む
14 褐色土　φ2～3mm ローム粒多く含む
15 褐色土　φ1～5mm ローム粒・ロームブロック多量含む
16 褐色土　φ1～2mm ローム粒・ロームブロック多量含む
17 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒少量含む
18 褐色土　φ1～2mm ローム粒少量、φ20～30mm ロームブロック微量含む
19 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む
20 黒褐色土　黒色土をやや少し、ローム粒・ロームブロック多量含む
21 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む
22 褐色土　φ1～2mm ローム粒多量、φ10～50mm ロームブロック少量含む
23 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒・φ10mm 前後のロームブロック少量含む
24 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む
25 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒・φ10mm 前後のロームブロック少量含む
26 黒褐色土　ローム粒・ロームブロックややや多く含む
27 黒褐色土　ローム主体
28 褐色土　φ1～2mm ローム粒多量、φ10～50mm ロームブロック少量含む
29 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒・φ10mm 前後のロームブロック少量含む
30 黒褐色土　ローム粒・ロームブロック多量に含む
31 黒褐色土　ローム主体
32 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒少量含む
33 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒・φ10～30mm 前後のロームブロック少量含む
34 黒褐色土　黒色土をやや多く、ローム粒・ロームブロック多く含む
35 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒・φ10mm 前後のロームブロックをやや多く含む
36 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒・φ10mm 前後のロームブロック少量含む
37 黒褐色土　ローム主体
38 黒褐色土　黒色土をやや多く、ローム粒・ロームブロック多量含む
39 黒褐色土　黒色土を少し、ローム粒・ロームブロック多量含む
40 黒褐色土　黒色土、白色粒土を少し、ローム粒・ロームブロック多量含む
41 黒褐色土　ローム主体
42 黒褐色土　φ1～2mm ローム粒少量含む

0　1:80　2m

第14図　遺構実測図（2）

第 4 節　遺物

遺構に伴うと考えられる遺物の出土は見られなかった。一部の遺構と調査区の南側の谷部に向かう傾斜地の遺物包含層から、縄文土器、土師器、須恵器、磨石などの石器が出土している。縄文土器は破片であるが、122 片を図示した。SK-01、SK-02 から出土しているものもあるが、これらの遺構から南側が包含層となっており、遺構に伴うより包含層の遺物と考えたほうが良いと思われる。

縄文土器

第 15 図には、SK-01,SK-02 等遺構出土でとり上げた資料について示す。

SK-01 出土は 4 点である。1 はやや太めの棒状工具による沈線を施しているもので、地縄文もあるようだが、摩滅著しく原体種別は不明である。色調はにぶい橙色を呈し、白色粒を少量含む。2 は縄文 LR 地上に沈線が施されるもので、灰褐色を呈する。1,2 いずれも後期前半堀之内式である。3 は後期後半安行 1 式の甕形深鉢で、口縁の隆起帯上に縄文 RL、以下刺突列などが確認される。にぶい褐色を呈する。4 は、底部近くまで縄文 LR が施されているもので、胎土には石英粒や雲母粒を多く含む。弥生式などの可能性も残るが、前期末～中期初頭と推定する。

5,6 は SK-02 出土である。5 は縄文 LR が確認されるもので、にぶい橙色を呈する。堀之内式であろうか。6 は RL 縦方向回転が確認されるもので加曽利 E 式と判断される。

7,8 は SK-12,13,14 出土の土器である。7 は縄文 LR が施されるもので褐灰色を呈する加曽利 B 式、8 は RL が施され色調はにぶい褐色を呈する後期安行式である。

9 ～ 32 は S17 出土の土器である。9 は繊維を含み縄文 RL が施される黒浜式で、にぶい橙色を呈する。10,11 はにぶい褐色を呈し胎土には石英粒を少量含む加曽利 E 式である。10 は加曽利 E Ⅰ式、11 は沈線→縄文 LR → 無文部ミガキが観察される加曽利 E Ⅲ式と判断される。12 は無節 L が口縁直下から施されるもので、堀之内式であろうか。13 も無節 L が施され、口縁一部に小突起が作出されているもので、堀之内式～加曽利 B 式の範囲内となろう。14 は縄文 LR 地上に浅い沈線が施されているもので、これも堀之内式と推定する。

15 ～ 17 は比較的シャープな沈線が斜方向或いは羽状に施されており、加曽利 B 2 式～曽谷式の範囲内と判断される。いずれも灰褐色または褐灰色を呈し、17 の胎土には石英を多く含んでいる。18 は縄文 LR 地上に半截竹管による沈線が施される加曽利 B 式の紐線文系粗製土器である。灰褐色を呈し、内面は丁寧なミガキが観察される。19 ～ 24 は縄文のみ施されるもので、19 は無節 L、20 ～ 22,24 は縄文 LR、23 は粗い縄文 RL が施されている。19 ～ 21 が概ね堀之内式、22 ～ 24 が加曽利 B 式と推定する。色調は 19 ～ 21 が灰褐色、22 が褐灰色、23,24 がにぶい褐色を呈する。

25 以下は曽谷式以降の土器群である。25 は沈線施文後に縄文 LR が施されている曽谷式で、灰褐色を呈し内面は丁寧に磨かれている。26 ～ 29 は後期安行式の体部破片と推定されるもので、沈線施文後に無節 L (26)、縄文 LR (28,29)、縄文 RL (27) が施される。26,27 はその後に無文部のミガキが見られ、28 ではナデ状～凹線状の無文部が確認される。26 ～ 29 いずれも色調は灰褐色または褐灰色を呈し、胎土中の鉱物は少ない傾向にある。30 は横位方向の条線が確認されるもので、後期前半もしくは後半の瘤付系に伴う粗製土器である。褐灰色を呈し、胎土には石英・雲母を含んでいる。31,32 は縄文のみ見られる安行式の体部破片で、32 は晩期に入る可能性もある。31 が縄文 LR、32 が RL で色調はいずれも灰褐色を呈している。

第 16 図は南区出土の土器を示す。1 は繊維を多く含み縄文 LR が施される前期黒浜式である。2 ～ 5 は中期の土器で、2,3 は隆線や口縁に沿う刺突列・角押文が施される阿玉台式、4,5 は縄文 LR（4）または RL（5）縦方向施文が確認される加曽利 E 式である。2 は褐色を呈し雲母を少量含む胎土、3 はにぶい褐色を呈し石英・長石を多く含む胎土が観察される。5 の土器では雲母が多く含まれている。6 は褐灰色を呈し無節 L の縦方向施文が観察されるもので、質感や縄文の特徴などから後期初頭加曽利 E Ⅴ式と推定する。

7 ～ 19 は堀之内式である。色調は灰褐色～にぶい褐色基調で、胎土中の鉱物は少ない傾向にあるが、8 や 10 では石英や長石を少量含んでいる。7,8 は比較的丁寧なミガキが観察される。9 は縄文 RL →やや太めの棒状工具による沈線→無文部ミガキが観察されるものだが、ミガキによる磨消しは不徹底である。堀之内1式体部文様の一部であろう。10 は沈線のみ確認できるもの、11 は縄文 RL 地上に沈線が描かれるもの、12 は細い多重沈線が確認できるものである。13 ～ 18 は縄文 RL（14,15）、LR（13,18）無節 L ?（16,17）が施されるもの、19 は条線施文で、これらは縄文や胎土の特徴などから堀之内式と判断される。

20 ～ 22 は加曽利 B 式で、色調は灰褐色基調である。21 の胎土には雲母を少量含む。20 は深鉢口縁近くの文様部分で、沈線→縄文 LR →丁寧な無文部ミガキが観察される。21 は沈線→縄文 RL →無文部ミガキが観察されるもので、加曽利 B 式横帯文系の土器であろうか。22 は瘤状の突起が付されているもので、壺もしくは注口土器と推定される。曽谷式以降の可能性も残る。23 ～ 25 は沈線→縄文充填が見られる体部破片で、後期安行式と推定する。いずれも無文部のミガキは比較的丁寧である。概ねにぶい褐色辺りのやや明るい色調を呈している。26 は弧状の沈線及び三叉文が見られるもので、晩期安行 3a 式と推定される。沈線施文後の細かい縄文 LR 充填が一部確認される。27,28 は撚糸文 R が見られるもので、大洞 C1 式以降の体部破片であろう。28 の胎土には小礫（チャート粒？）を含んでいる。

第 17 図には調査区内一括とりあげの出土土器を示した。

1 ～ 4 は中期後半の加曽利 E 式で、にぶい褐色基調である。いずれも概ね加曽利 E Ⅱ式あたりと推定する。2,4 では胎土に石英を少量含んでいる。1 は口縁部の隆線・沈線が確認され、2 は隆線施文後縄文 LR が施されている。3 は縄文 RL 縦方向施文後に隆線貼付→沈線施文が確認される。4 は縄文 RL 地上に沈線による懸垂文が描かれる。

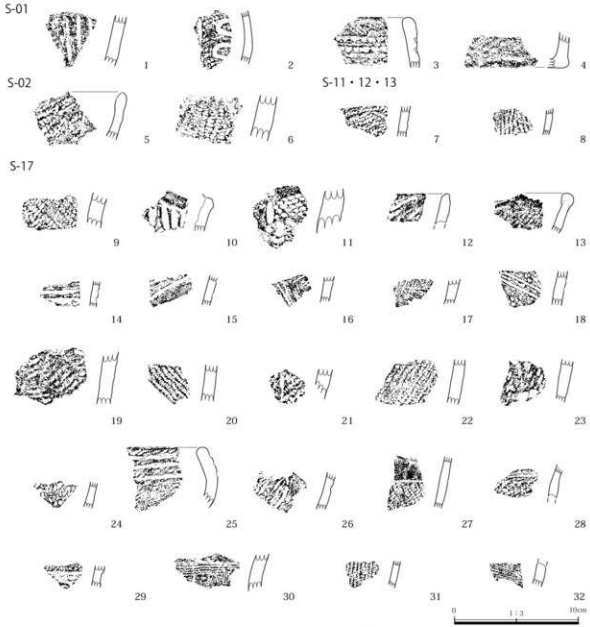
5,6 は口縁直下無文部下の隆線、およびこの下位に縄文施文が見られるものである。隆線上に縄文がかかる表出法などから、後期初頭加曽利 E Ⅴ式と推定される。いずれもにぶい橙色を呈する。7 は縄文 RL 縦方向施文のみ確認できる加曽利 E 式である。

8 ～ 23 は堀之内式と推定できるものである。にぶい橙色～にぶい褐色基調だが、にぶい黄橙色（14,16,22）や灰褐色（12）、橙色（19）なども見られる。全体に胎土中の鉱物は少ない傾向にあるが、18,20 のように白色粒や石英・雲母などをやや多く含む例も確認される。磨消縄文の見られる 10,13 ～ 16 では、沈線→縄文→無文部ミガキが観察され、これらは堀之内２式に比定できる。11 は縄文 LR 施文後に沈線が加えられている。12 は無文地上に多截竹管による沈線のみ見られる。縄文は RL（10,16）、LR（14,15）、L（13）と観察される。17 ～ 23 は縄文のみ施されるもので、19,22 が縄文 LR である以外は RL である。

24 ～ 33 は加曽利 B 式と推定されるものである。加曽利 B 式としては明るい色調の橙色～にぶい褐色が目立つ傾向にあるが、褐灰色（26）、灰褐色（29,30）も見られる。胎土では、全体に鉱物が少ない傾向にあるが、26 が透明粒を多く、27,30 が石英少量、33 が雲母を少量含んでいる。24 ～ 26 は横帯文が施される加曽利 B 1 ～ B 2 式、28 は加曽利 B 2 式の３単位突起小波状縁となる土器の口縁部である。26 ～ 28 の縄文は LR。29 は縄文 LR ? 地上に斜格子文様が左下がり→右下がり沈線の順で描かれる加曽利 B 3 式である。30 は磨消縄文の加曽利 B 3 式

で、沈線→縄文 RL・刻みが観察される。31 ～ 33 は体部破片で、沈線→縄文 LR（32 は RL）→無文部ミガキが認められる。

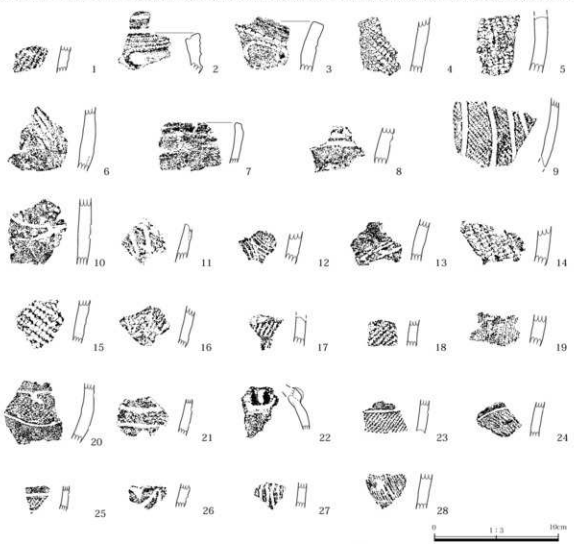
34 ～ 46 は後期後半の土器群である。色調はにぶい褐色や橙色が多いが、灰褐色（36,39,43,46）、褐灰色（38）も見られる。胎土では 34,38 が石英・白色粒・雲母をやや多く含んでいる。34,35 は口縁直下に帯状文様構成があるもので、明瞭な隆起帯となる 35 は安行1式、肥厚しているものの隆起帯とならない 34 は曽谷式となろうか。いずれも縄文は RL である。36,37 の体部破片も曽谷式～安行式の範囲内と推定される。38 は若干隆起帯の LR 縄文帯上に瘤の貼付→無文部ミガキが観察できるもので、瘤付系第２段階辺りの壺・注口土器と推定される。39,40 は口縁直下の刻み列が特徴的な瘤付系第３段階の口縁部破片、41,42 は北関東東部方面で目立つこの時期の粗製土器で、隆起線上の押捺が特徴的である。41 の沈線は先端が平らに近い工具による浅い施文である。46 の条線は瘤付系に伴う粗製土器で比較的良く見られるものである。43 は縄文 RL が帯状に施されるもので、縄文部と無文の空間部が交互的に描かれていることから、瘤付系精製土器文様の入組表現を縄文のみで描く土器の可



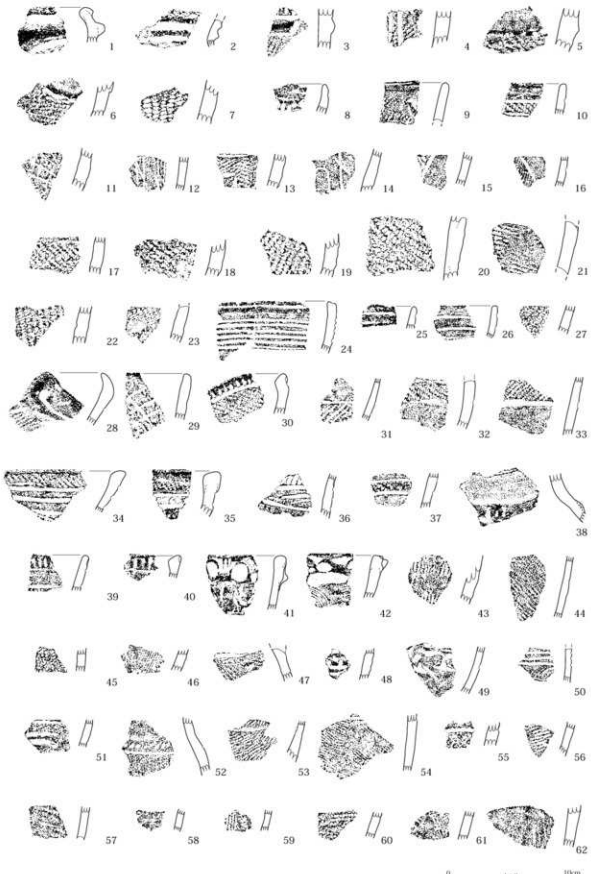
第15図　縄文土器実測図（1）

能性がある。これら異系統の瘤付系であるが、胎土や調整で極めて異質な特徴は認められない。44,45 は縄文のみだが胎土質感から後期安行式と推定される。47 は縄文 RL のみ見られるものだが、角度や内面調整などから台付鉢と推定され、時期も晩期となる可能性がある。

48 以下は晩期と判断したものである。これらの色調もにぶい褐色やにぶい橙色を基調とするが、黒褐色（50）、橙色（52）、灰褐色（57）、にぶい黄橙色（62）なども見られる。胎土では白色粒をやや多く含む 51,53,54,61 が確認される。48 の文様は羊歯状文の一部と観察でき、大洞 BC 式口縁近くの破片と推定する。49 は雲形文が描かれるもので、彫去手法とまでは言えないものの、沈線施文後の研磨に近い調整が観察され、大洞Ｃ１式または同Ｃ２式の鉢と判断する。50 は大洞式の深鉢または鉢で、弧状の沈線は変容雲形文の一部と判断する。ただし沈線→縄文 LR は認められるものの、無文部のミガキは不明瞭である。51 も同種文様のようだが、摩滅で縄文などは不鮮明である。52 は広口壺形に近い形態で口縁無文部直下に横位区画沈線・刺突列、以下撚糸文？施文の大洞Ｃ２式半精製土器であろうか。53 は縄文 L 地上に沈線が加えられているもので、52 と近い形態の粗製的な土器であろうか。54,56 ～ 60 は縄文のみの破片で判断は難しいが、縄文や胎土の特徴などから晩期と推定される。縄文は RL（54,60）、無節 R（56）、縄文 LR（57,58）である。55 は沈線→縄文 RL →無文部ミガキが確認できるもので、晩期安行式精製深鉢の一部であろうか。61 は撚糸文 R が施される大洞系の体部、62 は無文でケズリに近い調整の土器で、これらも晩期中葉の破片と想定される。既往の調査からも本遺跡における晩期中葉は大洞系



第16図　縄文土器実測図（2）

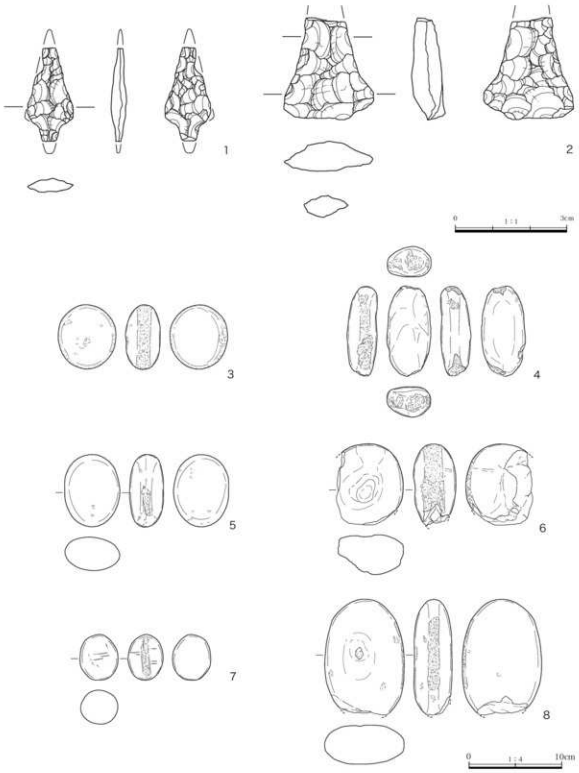


第17図　縄文土器実測図（3）

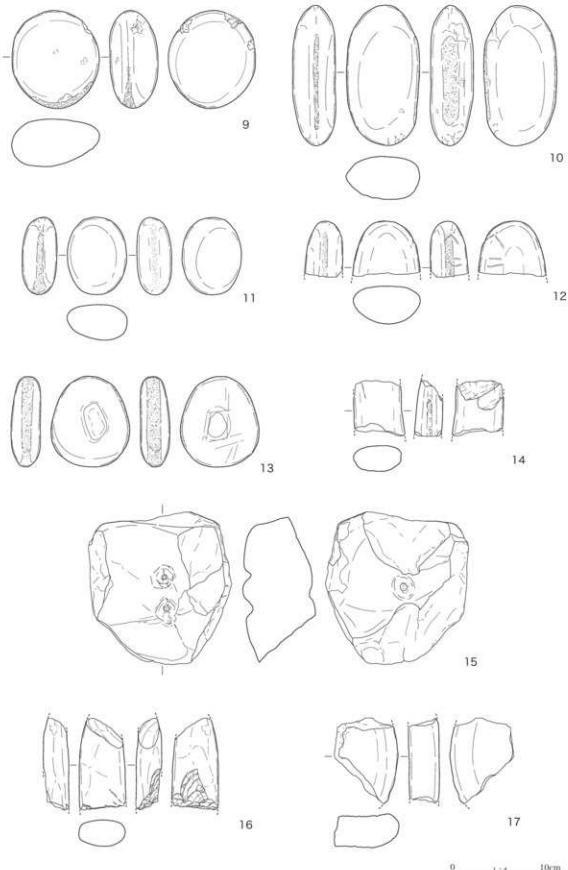
が主体となることが確認できるが、今回出土の資料においても、小片が少数の出土ながら、この傾向を追認することができる。

石器

縄文土器の他に、石鏃や磨石、石皿などが出土している。磨石には凹みが見られる磨石も含まれている。



第18図　石器実測図（1）



第19図　石器実測図（2）

土器

包含層からは須恵器の破片が出土している。いずれも小片であるが、４点を図示した。

1は甕の口縁部のみの破片で内側に自然釉が見られる。

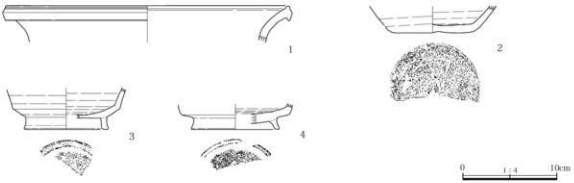
2は坏の底部で、底面にヘラ切りの工具の止め痕が見られる。胎土に海綿骨針の混入が見られる。胎土などの特徴から、木葉下窯跡の可能性が高い、８世紀後半の年代が考えられる。

3は高台付坏の底部の一部で、ヘラ記号が施され、高台は貼り付けである。胎土などの特徴から、益子窯跡群の篠倉窯跡の可能性が高い。９世紀第４四半から中頃の年代が考えられる。

4は高台付坏の底部の一部で、高台は貼り付けである。胎土などの特徴から、木葉下窯跡の可能性が高い。８世紀後半の年代が考えられる。

第２表　出土遺物石器観察表

図版No.	No.	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	特徴	出土位置
18	1	石臼	長	幅	厚	1.10	やや粗あくなチャート	先端と羊部を欠損凸羊有羊臼織文時代の後期中葉頃か～後半	1区
18	2	石臼	長	幅	厚	4.27	鹿瑪	先端の折れは衝撃剥離による。側縁黄面は石臼と思われない。また、逆剥の形状が左右対象でない点も気になる。	1区一括
18	3	磨石	長	幅	厚	207.80	安山岩質溶岩	全体的に磨石として使用。特に側面全体が強く使用されている。	SK-17
18	4	磨石	長	幅	厚	210.74	流紋岩	全体的に磨石として使用。両端部に敲き痕が見られる。	SK-17
18	5	磨石	長	幅	厚	234.08	安山岩	全体的に磨石として使用。側面の一部に敲き痕が見られる。	南
18	6	凹石	長	幅	厚	385.68	流紋岩	表裏面に凹有り。側面の一部に敲き痕が見られる。1/5欠損。	南
18	7	磨石	長	幅	厚	94.05	安山岩	全体的に磨石として使用。特に側面が強く使用されている。	南
18	8	磨石	長	幅	厚	651.09	安山岩	全体的に磨石として使用。表面の凹が見られる。側面の一部に強く使用された面が見られる。	南
19	9	磨石	長	幅	厚	662.69	安山岩	全体的に磨石として使用。	南
19	10	磨石	長	幅	厚	697.10	安山岩	表裏面と側面の一部を磨石として使用。	一括
19	11	磨石	長	幅	厚	282.63	安山岩	全体的に磨石として使用。	一括
19	12	磨石	長	幅	厚	215.49	安山岩	表裏面を磨石として使用。約1/2を欠損か。	一括
19	13	凹石	長	幅	厚	312.69	安山岩質溶岩	全体的に磨石として使用。表裏面に浅い凹が見られる。側面の一部に強く使用された面が見られる。	一括
19	14	磨石	長	幅	厚	128.37	安山岩	全体的に磨石として使用。両端部欠損。	南
19	15	多孔石	長	幅	厚	2,186.31	砂岩	周囲を欠損。表裏面を磨石として使用し、孔が３ヶ所に見られる。	一括
19	16	磨製石斧	長	幅	厚	210.76	流紋片岩	刃部、端部欠損。全体的にきれいに磨かれている。	一括
19	17	石皿	長	幅	厚	221.62	安山岩質溶岩	表面に緩く窪みがある。	一括



第20図　出土遺物実測図

第３表　出土遺物観察表

種別No.	No.	種類	器種	計測値		色調		焼成	胎土	器形・整形の特徴		遺存状態	備考
20	1	須恵器	甕	口径 [30.0]	外面	N5/灰		良好	白色粒子・白色粒少量、ガラス質透明粒子微量含む	内面	自然釉が見られる	口縁部 1/20	1区 SK-17
			底径 -	内面	N6/灰～N4/灰								
			器高 [3.8]										
20	2	須恵器	坏	口径 -	外面	2.5Y6/1 黄灰		良好	白色粒子・白色粒多量、礫・小礫少量、砂粒含む	外面	ヘラ切りの工具のため痕が見られる 海綿骨針が混入	底部 1/2	1区 SK-17
			底径 8.0	内面	2.5Y6/2 灰黄								
			器高 [2.8]										
20	3	須恵器	高台付坏	口径 -	外面	2.5YR5/2 灰赤		良好	白色粒・小礫やや多量含む	外面	底部の切り離しは不明 高台貼付 ヘラ記号が施されている	底部 1/6	1区南
			底径 [9.0]	内面	2.5YR4/3 にぶい赤褐								
			器高 [4.4]										
20	4	須恵器	高台付坏	口径 -	外面	10YR6/1 褐灰		良好	砂粒・白色粒少量、ガラス質黒色粒子微量含む	外面	底部の切り離しは不明 高台貼付 海綿骨針が混入	底部 1/5	1区南
			底径 [9.4]	内面	10YR6/1 褐灰								
			器高 [2.7]										

第4章　まとめ

先に述べたように、鳴井上遺跡は、栃木県北東部を代表する縄文時代後・晩期を主体とする遺跡として昭和 57（1982）年に栃木県教育委員会により重要遺跡 200 の一つに選出されている。

さらに、重要遺跡として遺跡の範囲と内容の確認調査を平成 12（2000）年度（第１次～第３次調査）、平成 13（2001）年度（第４次～第 10 次調査）に実施している。この確認調査の結果、縄文時代中期前葉の阿玉台式から晩期中葉の大洞C式の時期にあたる竪穴住居跡と土坑検出され、この時期が中心の集落であることが確認されている。また、これらの時期を前後する前期の花積下層式･関山式及び諸磯ａ式、また晩期終末の大洞A式やA' 式、さらに弥生式土器に該当する土器も等も多く出土しており、鳴井上遺跡は、これらに関係する時期の遺構の存在も期待されていた。

また、縄文時代以外にも、新たに古墳時代後期から平安時代にかけての集落の存在が明らかになっており、これらの成果をもとに縄文時代の集落の範囲と、古墳時代後期から平安時代にかけての集落の範囲を推定している。

今回の調査では、縄文時代及び古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡等の集落に関連した遺構の検出は出来なかったが、調査区の南側で多量の遺物が出土している。上記の形式の縄文土器の他に、前期黒浜式、堀之内式～加曽利Ｂ式、曽谷式の土器などの土器を確認することができた。

また、縄文土器と同様、土師器、須恵器も数多く出土していることから、確認調査で推定した遺跡の範囲は若干広がりを見せることが考えられる。

写　真　図　版

SK-01　完掘（北から）

SK-02　完掘（西から）

SK-03　土層断面（東から）

SK-04　土層断面（東から）

SK-05　土層断面（東から）

SK-06　完掘（東から）

SK-07　完掘（東から）（南東から）

SK-08・09・10　完掘（南西から）

SK-12～16　完掘（東から）

SK-11・12・13　完掘（東から）

図版六　遺構写真

SK-01　土層断面（南から）

SK-02　土層断面　（東から）

SK-03　土層断面　（東から）

SK-04　土層断面　（東から）

SK-05　土層断面　（東から）

SK-013・14　土層断面　（東から）

図版九　遺構写真

SK-17　完掘　（北から）

SK-17　完掘　（南西から）

SK-17　完掘　（北から）

SK-17　完掘　（南から）

図版一一　遺構写真

SK-17　完掘　（南西から）

SK-17　完掘　（北東から）

図版一一　遺構写真

SK-17　完掘　（南西から）

SK-17　完掘　（東から）

SK-17 内 Pit　完掘　（東から）

SK-17 内 Pit　完靴　（東から）

SK-17 土層断面確認状況　（北から）

SK-17 土層断面確認状況　（南から）

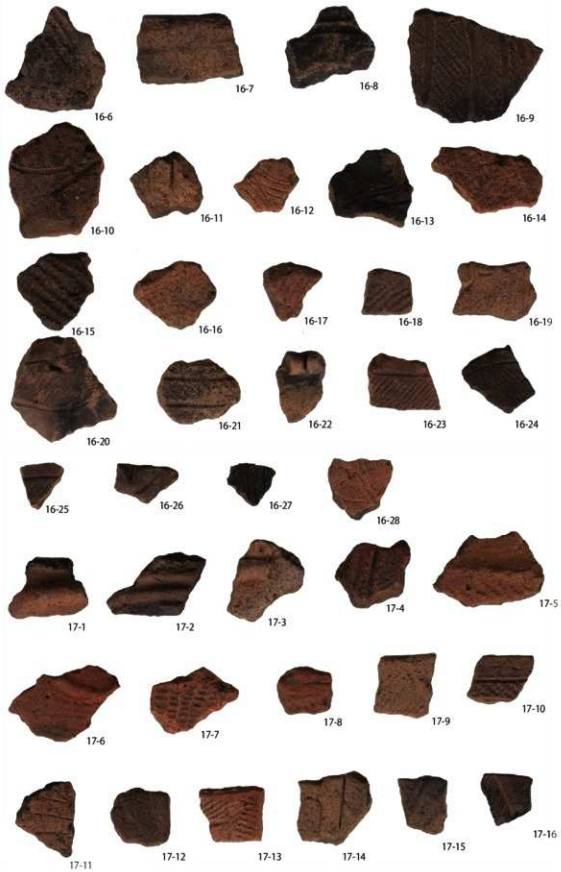
SK-17 土層断面　（東から）

SK-17 土層断面　（西から）

図版一六　遺物写真

15-1 S-01
15-2 S-01
15-3 S-01
15-4 S-01
15-5 S-02
15-6 S-02
15-7 S-11・12・13
15-8 S-11・12・13
15-9 S-17
15-10 S-17
15-11 S-17
15-12 S-17
15-13 S-17
15-14 S-17
15-15 S-17
15-16 S-17
15-17 S-17
15-18 S-17
15-19 S-17
15-20 S-17
15-21 S-17
15-22 S-17
15-23 S-17
15-24 S-17
15-25 S-17
15-26 S-17
15-27 S-17
15-28 S-17
15-29 S-17
15-30 S-17
15-31 S-17
15-32 S-17
16-1
16-2
16-3
16-4
16-5

図版一七　遺物写真


16-6
16-7
16-8
16-9
16-10
16-11
16-12
16-13
16-14
16-15
16-16
16-17
16-18
16-19
16-20
16-21
16-22
16-23
16-24
16-25
16-26
16-27
16-28
17-1
17-2
17-3
17-4
17-5
17-6
17-7
17-8
17-9
17-10
17-11
17-12
17-13
17-14
17-15
17-16

図版一八　遺物写真　縄文土器3

図版一九　遺物写真　土器・石器

18-1

18-2

18-3

18-4

18-5

18-6

18-7

18-8

19-9

19-10

19-11

19-12

19-13

19-14

19-15

19-16

19-17

20-1

20-2

20-3

20-4

図版二〇　調査後の状況

報告書抄録

ふりがな	なるいうえいせき
書名	鳴井上遺跡Ⅱ
副書名	快適で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道那須黒羽茂木線下境工区に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第４１６集
編著者名	植木茂雄
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒３２９－０４１８　栃木県下野市紫４７４番地　TEL ０２８５－４４－８４４１
発行機関	栃木県　公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦　2024年3月28日（令和6年3月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
なるいうえいせき 鳴井上遺跡	なすからすやまし 那須烏山市 しもさかい 下境	52	5399	36°37′46″	140°10′15″	20200901 ～ 20201130	164	道路拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳴井上遺跡	集落	縄文 古墳～ 奈良・平安	土坑17基	縄文土器・土師器・須恵器	縄文時代・古墳～奈良・平安時代の集落

要約	鳴井上遺跡は、栃木県東部に位置する那須烏山市大字下境に所在する。 栃木県教育委員会が昭和54（1979）年度及び昭和57（1982）年度に実施した、栃木県重要遺跡基本資料整備事業において200遺跡に選出されている。 平成12（2000）年度（第1次～第3次調査）、平成13（2001）年度（第4次～第10次調査）において遺跡の範囲と内容の確認調査を実施し、遺跡の範囲が推定されている。 遺物包含層から、縄文土器、土師器、須恵器が出土。遺跡範囲の広がりを確認。

栃木県埋蔵文化財調査報告第416集

鳴井上遺跡Ⅱ

－ 快適で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道那須
黒羽茂木線下境工区に伴う発掘調査 －

発行　栃 木 県

宇都宮市塙田1－1－20

TEL　028（623）3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町１－８

TEL　028（643）1011

令和６年３月28日発行

編集　公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

TEL　0285（44）8441

印刷　下野印刷株式会社